

Title	コンフリクトに関する一実験的研究： コンフリクト解決後の不協和情報呈示の効果
Sub Title	An experimental study of conflict : the effects of presentation of dissonant information after conflict resolution
Author	榊, 博文(Sakaki, Hirobumi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1972
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.12 (1972. ) ,p.77- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000012-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000012-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# コンフリクトに関する一実験的研究

—コンフリクト解決後の不協和情報呈示の効果—

## An Experimental Study of Conflict; The Effects of Presentation of Dissonant Information after Conflict Resolution

榊 博文  
*Hirobumi Sakaki*

### 序

態度変容を説明する一貫性理論 (Consistency Theory) には主として Heider (1946) の Balance Model, Osgood & Tannenbaum (1955) の The Principle of Congruity, Festinger (1957) の Theory of Cognitive Dissonance が考えられる\*。この三者は微妙なニュアンスの違いはあるにせよ、いずれも認知に不一致或は不協和が存在すると、人は心理的に緊張を生じ、それを解消しようとする行動の一つとして態度変容を起すと考えている。そして、これらのうちでも殊に Festinger の認知的不協和の理論は、「不一致の源としての知識および行動の要素間の矛盾を対象としており、それ故に態度変容のみならず一般的認知過程についても言及可能である」(Mann, 1969) 故に、数多くの実験的研究を呼び起しており、特に、態度変化に影響を及ぼすと考えられる情報の信頼性、情報伝達の方法と内容、抑鬱性・攻撃性・自己評価等の受け手の特性、課題への積極的参加等の諸問題は、集団行動、社会的相互作用、対人知覚、意志決定等の諸領域とともに、現在の社会心理学における重要な領域の一つとして、現在も多くの研究を触発している。

Festinger (1957) によると、コンフリクトとは相反する二個の選択肢のうちのいずれか一方を選ばなければならない事態のことであり、不協和とはこのコンフリクト決定がいずれか一方を選び同時に他方を捨てて行なわれたことによる一つの不可避的結果である。即ち厳密な不

協和の定義を借りれば、一つの選択肢の逆の面が他方の選択肢から帰結したのである。そして人はコンフリクト解決後、意図的或は無意図的に協和をもたらす情報に接触し、同時に不協和をもたらす情報は回避することによって、自己の決定に対する確信を増大させ、選択肢の間の魅力の格差を増大させようとするモチベーションを持つ。

一方、実験的にコンフリクトを導入する方法には、従来、運動コンフリクト (Andreas 1958, Berlync 1961, Ringuette 1965, 山本 1967 など)、光の弁別コンフリクト (松山 1965, Worrell & Castaneda 1961, Worrell 1962, Worrell & Hill 1962, Worrell 1963, Worrell 1964, Worrell & Worrell 1964 など)、感情コンフリクト (Arkoff 1957, Schill 1966 など)、知覚コンフリクト (浜 1965 ab など) と呼ばれるものがあった。

しかし、これらの実験的コンフリクトの研究は、Festinger の理論とは必ずしも関連づけられてはいなかった。本実験は、実験コンフリクトに、新たに不協和事態を実験的に導入することにより、両者の関連づけを試みたものである。

本実験のコンフリクトは形容詞を対にしていずれか一方を選択させるという感情コンフリクトに基づいており、コンフリクト解決後にさらにその不協和を増大させる手段として不協和情報呈示という新事態を導入し、そのことによって自己確信 (self-confidence) に動揺を与え、その後の決定変化および反応時間にどのような影響

\* 他には Newcomb (1953) の ABX System, Cartwright & Harary (1956) の Structural Balance 等の一貫性理論が比較的知られている。

を及ぼすかを検討する。

被験者は正常者と異常者に分かれ、コンフリクトの型は Lewin (1935) の接近・接近コンフリクト (ApAp Conflict) と回避・回避コンフリクト (AvAv Conflict) の 2 型に弱コンフリクト (Weak Conflict) を加え、3 型とした。異常者はコンフリクトに対する耐性 (tolerance) が弱く、自己確信の程度が低いと考えられるので、正常者に比較してコンフリクト解決に時間を要し、又情報の影響を受けやすいことが予想される。コンフリクトの型については、選択肢の間の拮抗反応傾向が大なる故に Strong Conflict であると考えられる ApAp Conflict と AvAv Conflict は Weak Conflict より反応時間が長く、Strong Conflict のうちの AvAv Conflict は回避傾向を含む故に ApAp Conflict より反応時間が長いであろうことが仮定され、そして又 Strong Conflict の場合はコンフリクト解決後の不協和が大い故に不協和情報呈示の影響を受けやすいであろうと仮定される。

本実験は又、被説得性に関する性差の検討をも目的とした。Janis & Field (1959) および King (1959) はアメリカの被験者を対象に一般的に女性の方が男性より被説得性が高いことを見出したが、同様に Whittaker & Meade (1967) の Cross Cultural な研究でもレバノンの被験者を除いて、ローデシア、ブラジル、香港、ペルー、アメリカの被験者において女性の方が被説得性が高い傾向を見出し、又 Singh (1970) のインドの被験者を対象とした研究においても同様の結果を得ている。又、パーソナリティと被説得性に関して、男性は自己評価 或は パーソナリティ属性としての一般的自信 (general self-confidence) が低い方が高い人よりも全体的に被説得性が高いが (Berkowitz & Lundy 1957, Janis 1954, Janis 1955, Janis & Rife 1959, Lesser & Abelson 1959, Linton 1954, Linton & Graham 1959 など)、女性においては男性において見られたようなパーソナリティ要因による差は見られない (例えば Janis & Field 1959)。本研究では以上の二点がわが国においても見出されるか否かを検討するが、異常者 (特に神経症者) は、特殊な例外を除いて正常者より不安動因が高く、一般的に自己評価が低いと考えられるので、パーソナリティ要因は正常者・異常者のカテゴリーで分けられた。

なお、コンフリクト事態における決定後の協和情報並びに不協和情報の探索或は好みについては、Seeking Information の問題として Festinger (1957), Canon

(1964), Jecker (1964) 等によって扱われているが、不協和情報を実験的に呈示して、その後の決定および反応時間に及ぼす影響を検討しようとするのは本実験が最初の試みのようである。

## I 実験方法

### (1) 被験者

正常者 18 名 (男女各 9 名)、異常者 18 名 (男女各 9 名)、計 36 名である。正常者は普通に日常生活を送っている者で学生が大部分であり、異常者は横浜市の日吉病院に入院中の患者に協力を願った。異常者は、神経症 (ノイローゼ)、精神分裂病、躁鬱病その他の患者であり、一括して異常者としたが、大部分は神経症と精神分裂病の患者である。実験の内容が理解できない、或は刺激に対して反応出来ない等の重症の患者は含まれていない。

### (2) コンフリクト型と不協和情報

コンフリクト型について、ここでは Schill (1966) のコンフリクト般化の研究で用いられた形容詞語群のうち、任意に選び出した以下の 20 語を刺激材料とした [表 1]。一般に社会に受容されている (Positive) と思わ

[表 1] 実験に用いられた形容詞語群

Positive な形容詞	Negative な形容詞
がまん強い	短気な
信頼できる	あてにならない
想像力のある	にぶい
親しみのもてる	敵意のある
正直な	不正直な
陽気な	陰気な
安定した	扱いにくい
感受性のある	鈍感な
親切な	冷酷な
賢明な	馬鹿な

れる 10 語と、受容されていない (Negative) と思われる 10 語である。Weak Conflict は、Positive な語と Negative な語の対から成っており、Strong Conflict のうちの ApAp Conflict は Positive なもの同志の対、AvAv Conflict は Negative なもの同志の対から成っている。対の数は各コンフリクト型につき 5 対である。

不協和情報は、あらかじめ約 40 人の学生に作成してもらったもののうち、一般的であり情報の効果が個人によって偏りのないと思われるものを使用した。この 40 人は本実験の被験者とは重複しない。不協和情報は、被

験者が選んだ選択肢に対して不協和を与えるものと、選ばなかった残りの選択肢に対して協和を与えるものとに分けられる。例えば、「がまん強い」に対する不協和情報は、「がまん強さなどテンポの速い現代では通用しない」などであり、「陽気な」に対する協和情報は「明るく陽気な性格は自他ともに幸福にする」などとなる。用意されている情報は1つの形容詞について、その語に協和するもの3、不協和なもの3である。コンフリクト対および不協和情報はスクリーンに提示されるが、Weak Conflict 対においては、Positive な特性語の位置のみがスクリーンの一方の側に偏らないよう配慮した。

(3) 手続き

実験手続きは正常者・異常者ともに同一である。いずれもそれぞれ〔決定に不協和〕群——自己を選んだ選択肢に対して不協和な情報が提示される、〔相手方に協和〕群——選ばなかった方の選択肢に対して協和情報が提示される、〔無情報〕群——情報が全く提示されない、の3群に分けられる。前二者は情報提示の形は異なるが、いずれも不協和を喚起するものである。各群は6名より成り、3群とも Weak Conflict, ApAp Conflict, AvAv Conflict の3つの型のコンフリクトのすべてを経験する。コンフリクト型の提示順序は、Weak—ApAp—AvAv, Weak—AvAv—ApAp, ApAp—Weak—AvAv, ApAp—AvAv—Weak, AvAv—Weak—ApAp, AvAv—ApAp—Weak のように6通り存在するが、各群6名ずつであるから各々振り当て、コンフリクト提示順序の効果、即ちコンフリクト般化の効果は相殺される。なお、被験者は Weak と ApAp のコンフリクトの時は自分が人から評価されたいと思う方を選択するように教示され、AvAv のコンフリクトにおいては評価されたくないと思う方を選択するように教示される。被験者は一度目のコンフリクト解決 (Pre Information

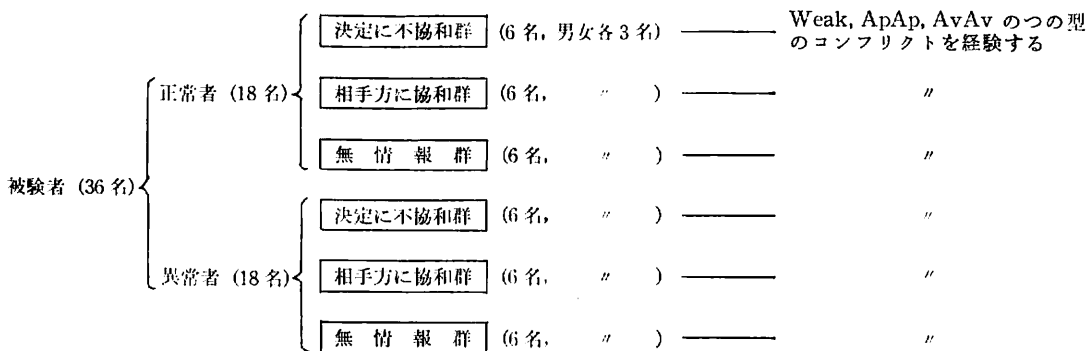
Conflict) を行なった後、いずれかの形の不協和情報を提示され (無情報群では提示されない)、もう一度同一のコンフリクトの対の解決 (Post Information Conflict) を行なう。不協和情報は3つの文章から成っており、1つずつ3回に分けてスクリーンに提示される。3つの不協和情報が提示される時間は約30秒であり、〔無情報〕群ではこの間何も提示されない。従って各被験者は実験の間、3つのコンフリクト型の提示を受け、1つのコンフリクト型は5対より成るから合計15のコンフリクト対を提示され、その各々を2度行なう。なお被験者は全く個別に実験を受けた。インストラクションは次の通りである。

「スクリーンに2つの言葉が左右に同時に提示されます。それを見てあなたがそのように人から評価されたいと思う方のボタン、右なら右のボタン、左なら左のボタンを押して下さい。又、人から評価されたくない方を押す場合もありますが、評価されたい方を押すか、されたくない方を押すかはこちらで指定しますから、それに応じてどちらか一方を選んで押して下さい。ボタンを押すとスクリーンに出ていた言葉が消え、しばらくして3つの文章が1つずつ3回にわたって提示されます。それはただ見ていて下さい。文章が3つ提示されると最初の言葉の対がもう一度出ます。そこでもう一度どちらかを選んで押して下さい (無情報群に対しては一度目の決定をした後暫く休みがあり、その後もう一度同じ対の決定をしてもらう旨を告げる)。」

ジェネラル・デザインを〔図1〕に示す。

(4) 装置

椅子に座った被験者の前方、ほぼ目の高さの位置の、高さ28.6cm、幅43.6cmのスクリーンの手前25cmの位置に、反応ボタンが左右に2個備えられている。ボタン間隔は7.5cmであり、被験者は反応ボタン装



〔図1〕 実験のジェネラルデザイン

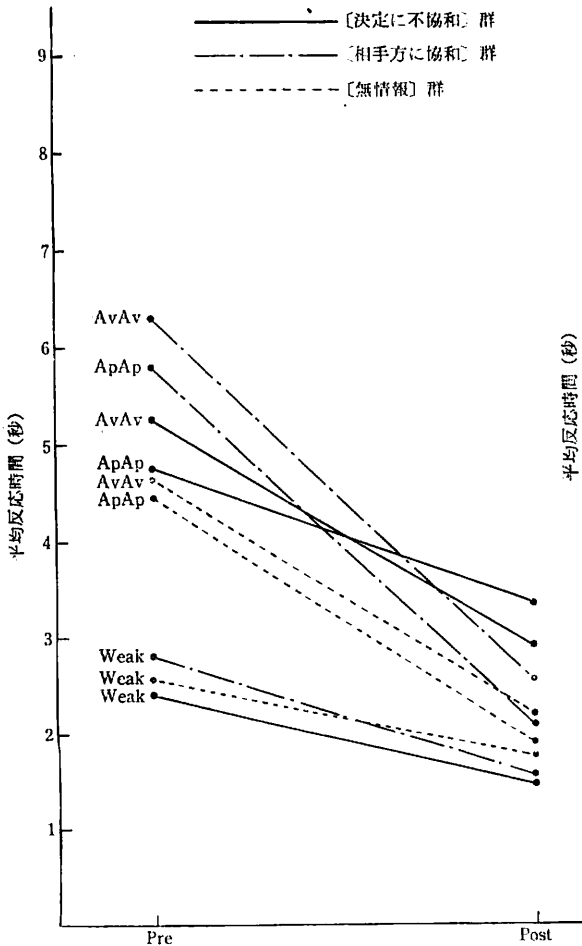
置のすぐ手前に利き手を置くように教示される。実験者側の操作により、刺激語がスクリーンに呈示されると同時にデジタルカウンターが作動し、そして被験者がどちらか一方のボタンを押すと同時に刺激語が消え、カウンターが停止し、反応時間が記録される。この反応時間をコンフリクト強度の測度とし、1/1000 秒まで測定可能である。さらに、被験者がボタンを押すと同時に2つの選択肢のうちどちらを選んだかが記録用ランプによって明示され、それに応じてどちらの不協和情報を呈示するかが決定される。

## II 結 果

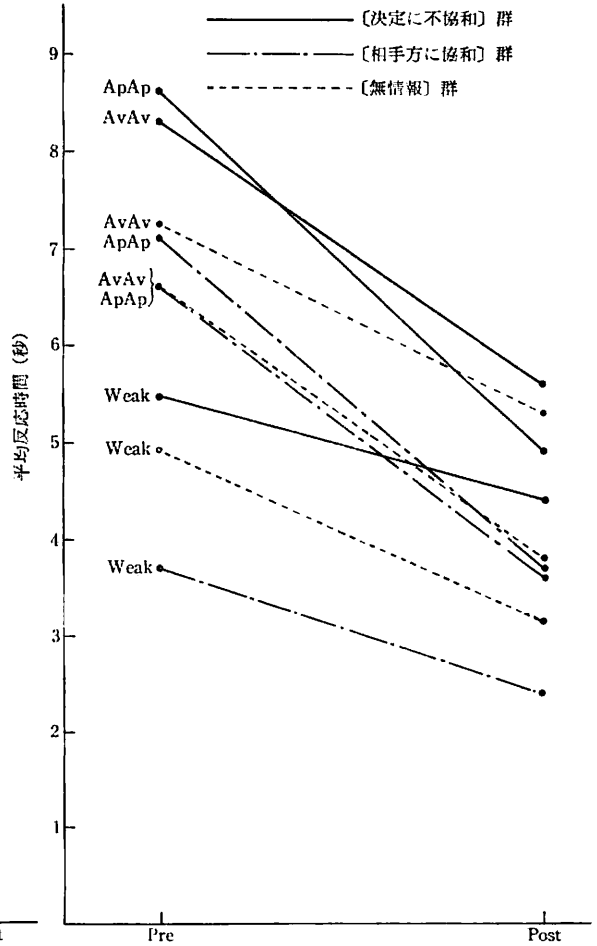
〔図2〕は正常者について、〔図3〕は異常者について、〔決定に不協和〕群、〔相手方に協和〕群、〔無情報〕群の各群の Pre と Post における平均反応時間を示したも

のである。図によると一般的に異常者の方が正常者より反応時間が長く、又 Pre の段階において正常者・異常者ともに Weak Conflict よりは Strong Conflict の方が反応時間が長いことが分る。

(1) まず Pre の段階における平均反応時間の差が異なるコンフリクト型において見いだされるか否かを、各情報群毎に一元配置分散分析を行なって検討した。〔表2〕はその結果を要約したものである。各群とも Weak, ApAp, AvAv の各条件において有意に反応時間が異なっている。次に Tukey 検定法を用いて各々のコンフリクト型をひとつずつ比較したところ、正常者・異常者ともに Weak と AvAv の差および Weak と ApAp の差が〔決定に不協和〕群と〔相手方に協和〕群において有意であり ( $P < .05$ )、〔無情報〕群においては Weak と AvAv の差が有意であった ( $P < .05$ )。ApAp と



〔図2〕 正常者各群の各コンフリクト型における平均反応時間



〔図3〕 異常者各群の各コンフリクト型における平均反応時間

〔表2〕 Pre の段階における異型コンフリクト間の反応時間差の検定

情報群	正常者			異常者		
	MS	df	F	MS	df	F
〔決定に不協和〕群	11.500	2/10	4.227*	4.140	2/10	9.490**
〔相手方に協和〕群	20.855	2/10	12.713**	20.560	2/10	4.498*
〔無情報〕群	7.850	2/10	35.681**	9.900	2/10	4.142*

\*  $P < .05$ , \*\*  $P < .01$

〔表3〕 Pre の段階における同型コンフリクト間の反応時間差の検定

コンフリクト型	正常者			異常者		
	MS	df	F	MS	df	F
Weak Conflict 型について比較	0.205	2/15	0.402 n. s.	[	2	$\chi^2=0$ ] n. s.
ApAp Conflict 型について比較	2.740	2/15	0.520 n. s.	0.480	2/15	0.038 n. s.
AvAv Conflict 型について比較	2.900	2/15	2.838 n. s.	2.225	2/15	0.100 n. s.

n. s., Non Significant.

AvAv の差は 3 群とも有意ではなかった。

以上の異型コンフリクト間の有意差を確実なものにするために、各群の同型コンフリクト間の有意性検定を行なったところ、〔表3〕に示す通り正常者・異常者のいずれにおいても有意差は見られなかった。なお、この分散分析を行なうに当たって前もって Cochran の法によって分散の同質性を検定したが、異常者の各群の Weak Conflict 型の比較では分散の同質性が得られなかったためメディアン検定を行なった。

Pre の段階についてさらに行なわれた分析は、コンフリクト条件差と被験者差（個体差のことではなく正常者と異常者の差を意味しており、以下もこの意味に用いる）の二元配置分散分析である。結果は〔表4〕に示す通りコンフリクト型による差、被験者差ともに有意であった。コンフリクト条件差についての個々の分析は前述したが、情報の出し方をコミにした分析でも有意差が出たわけである。被験者差が有意であるということは、〔図2〕および〔図3〕で見い出されたところの異常者の方が正常者より反応時間が長いという事実が、統計的に証明されたことを意味する。そこでさらにそれぞれのコンフリクト型毎の被験者差を検定してみたところ、いずれの型においても有意差が見い出された（Weak Conflict において； $df=1/102$ ,  $F=18.229$ ,  $P < .01$ , ApAp Conflict において； $df=1/102$ ,  $F=16.864$ ,  $P < .01$ , AvAv Conflict において； $df=1/102$ ,  $F=8.265$ ,  $P < .01$ ）。

(2) Post の段階について、同様に反応時間を測度として行なったコンフリクト条件差と被験者差の二元配

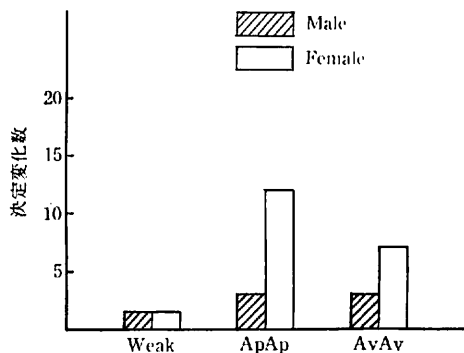
〔表4〕 Pre の段階におけるコンフリクト型と被験者差の二元配置分散分析

Source	SS	df	MS	F
コンフリクト型(C)	131.24	2	65.62	34.177**
被験者(S)	82.51	1	82.51	42.973**
C × S	2.23	2	1.11	0.578
e	196.16	102	1.92	
t	412.14	107		

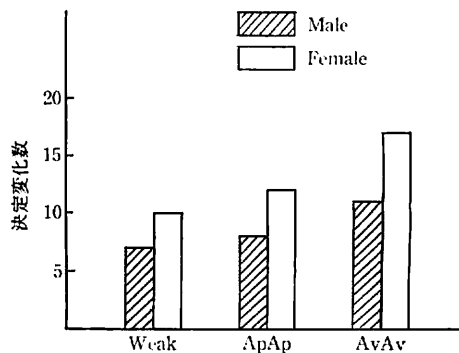
\*\*  $P < .01$

置分散分析では、コンフリクト型による差は有意ではなかったが、被験者差は有意であった ( $df=1/102$ ,  $F=15.238$ ,  $P < .01$ )。又 Pre における反応時間から Post におけるそれを減じた値を測度とした被験者差とコンフリクト条件差と情報の出し方による三元配置分散分析では、コンフリクト型による差が有意であった ( $df=2/4$ ,  $F=9.669$ ,  $P < .05$ )。いずれの分析においても情報の出し方による差は有意ではなかった。

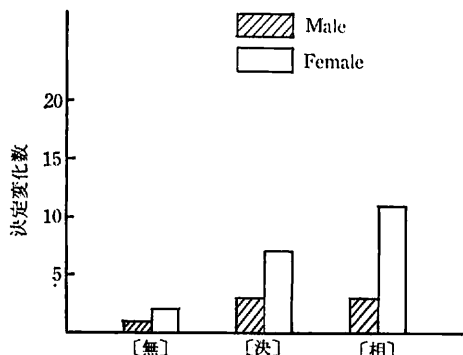
(3) 次に、決定が Pre と Post で変化した数が、コンフリクト型、情報の出し方等によって異なるか否かを検討した。〔図4〕と〔図5〕はコンフリクト型について、〔図6〕と〔図7〕は情報の出し方について決定変化数を示したものである。コンフリクト型については情報の出し方がコミにされて表わされており、情報の出し方についてはコンフリクト型がコミにされている。〔表5〕は決定変化数についてのメディアン検定の結果を要約し



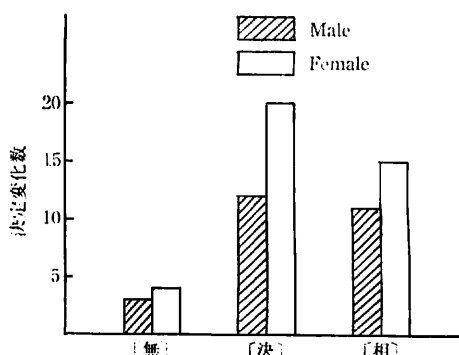
〔図4〕 コンフリクト型による決定変化数  
……正常者について



〔図5〕 コンフリクト型による決定変化数  
……異常者について



〔図6〕 情報の出し方による決定変化数  
……正常者について



〔図7〕 情報の出し方による決定変化数  
……異常者について

たものであり、正常者・異常者ともにコンフリクト型によって差があり、情報の出し方については異常者において差がみられたことを示している。又、正常者と異常者とを比較した時、異常者の方が有意に決定を変化させた ( $df=1, \chi^2=7.269, P<.01$ )。性差については後述する。

(4) 個人によって全体的に反応の速い人もいれば遅い人もいる。5対あるコンフリクト対のうち3番目に大きい値、即ち中央値をその個人のそのコンフリクト型における反応レベルとすると、反応レベルより時間を要しているコンフリクト対とそうでないコンフリクト対では

〔表5〕 Pre と Post で決定が変化した数を測度としたメジアン検定

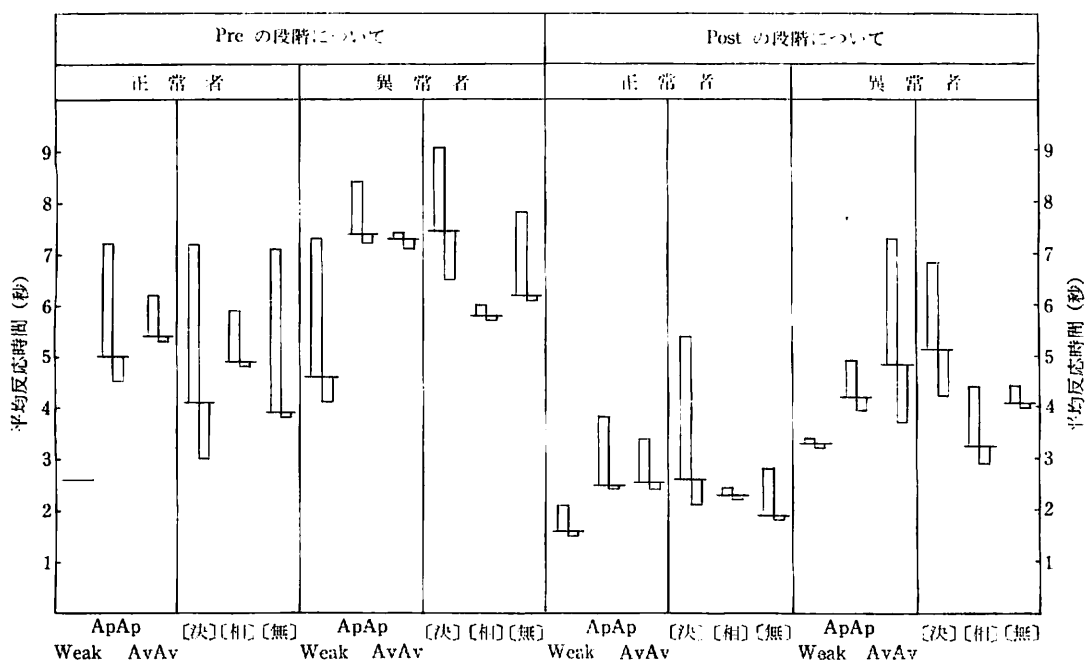
被験者	コンフリクト型による差		情報の出し方による差	
	df	$\chi^2$	df	$\chi^2$
正常者	2	70.185***	2	4.691*
異常者	2	69.685***	2	9.947**

\*  $P<.10$ , \*\*  $P<.01$ , \*\*\*  $P<.001$

決定変化数が異なるであろうとの予測のもとに、Pre の段階について分析を行なった結果、正常者・異常者いずれにおいても有意差が認められた (正常者;  $df=1, \chi^2=6.591, P<.02$ , 異常者;  $df=1, \chi^2=4.556, P<.05$ )。即ち、正常者・異常者ともに Pre の段階において決定に迷ったコンフリクト対はそうでないコンフリクト対と比較して、二度目の決定が変化しやすいということである。

以上の分析を逆の方向から観察すると、決定が変化したコンフリクト対はそうでないコンフリクト対と比較して、その平均反応時間が長いだろうことが予測される。〔図8〕は正常者および異常者についてコンフリクト型と情報の出し方のカテゴリー別に示したものであるが、正常者・異常者ともに、Pre・Post 如何にかかわらず決定が変化している場合は変化しなかった場合に比べて反応時間が長い傾向が見い出される。なお、ここでは有意性検定はしていない。

又、Pre において自己の反応レベルより時間が長いコンフリクト対は、Post においても長い傾向が見い出



〔図 8〕 決定が変化したコンフリクト対と変化しないコンフリクト対の平均反応時間。図中の横線がそのコンフリクト条件ないしその群の全体の平均値を表わし、左側の棒グラフが決定が変化したコンフリクト対の平均値、右側が変化しなかったコンフリクト対の平均値を表わす。

(注 1) 棒グラフが示されていないのは、そのコンフリクト条件における決定の変化数が 0 又は 1 であったためグラフに表わしても無意味であると思われるものである。

(注 2) コンフリクト条件の項目では情報の出し方はコミにされており、情報の出し方による項目ではコンフリクト条件はコミにされている。

された (正常者;  $df=1, \sigma^2=18.148, P<.001$ , 異常者;  $df=1, \sigma^2=8.802, P<.005$ )。

(5) 最後に、被説得性に関する性差の分析を Mann-Whitney の  $U$  検定によって行なった。被説得性の高低の測度は決定変化数である。〔無情報〕群は当然分析の対象から除外した。結果は、正常者における性差は有意であり ( $U=33, P<.05$ )、女性の方が被説得性が高いことを証明したが、異常者においては有意差が出るに至らなかった。正常者・異常者をコミにした分析ではやはり有意であった ( $U=107, P<.05$ )。

次にパーソナリティ要因によって被説得性に性差があるか否かを検討した。測度は同じく決定変化数である。結果は、女性においては有意ではなかったが、男性における  $U$  の値は 30.5 で、ほぼ有意とも言うべき値であった (危険率 5% 水準でのこのケースにおける  $U$  の値は、 $U \leq 5$  or  $U \geq 31$  である)。

### III 考 察

(1) 本実験の結果は、まず Pre の段階において、

正常者・異常者ともに、Strong Conflict と Weak Conflict の間の平均反応時間に差があったことを明らかにした。Strong Conflict は、一般的に Positive 或は Negative と考えられている形容詞を対にしたものであり、被験者の反応傾向に拮抗を生じさせ、コンフリクト解決を困難にしたものと考えられる。一方、Positive な形容詞と Negative な形容詞の組み合わせである Weak Conflict においては、反応傾向間の干渉が少なく、コンフリクト解決は比較的容易であった。コンフリクト型による反応時間差は、Worell (1963), Warell & Worell (1964), 浜 (1965ab), 松山 (1965), Schill (1966), 山本 (1967) 等によって明らかにされている。Schill や山本の研究では、Strong Conflict を ApAp Conflict と AvAv Conflict に分けて実験計画しているが、Schill はその間の有意差検定をしておらず、山本の実験では、AvAv の方が ApAp よりも反応時間が遅いことを一部証明している。本実験では ApAp と AvAv の間に有意差は認められなかったが、データからは AvAv は ApAp より遅い傾向が認められる。



同じく Pre の段階で、異常者の平均反応時間は正常者のそれに比べて有意に長かったが、これは当然予想されたことであり、異常者（特に神経症患者）は、パーソナリティ的にコンフリクト耐性が低いので、コンフリクト事態において少なからず強い葛藤状態に陥るものと考えられる。分裂病者は一般的に刺激に対する反応が遅いので、今回の実験での反応の遅さはそこから来るものか、或は葛藤から来るものかどうかは断定出来ないが、第一に軽症の患者を採用したということと、第二に分裂病者でも決定が多く変っていることから考え合わせて、やはり葛藤からくる反応の遅さであろうことを指摘しても良いのではないだろうか。

(2) Post の段階についての分析は情報が呈示されたことの影響を教えてくれるが、結果はあまり明確ではなかった。わずかに言えることは、Post においても異常者は正常者よりも反応が遅いということと、正常者・異常者ともに、コンフリクトの型によって Pre から Post へ反応の速くなる度合いが違うということである。後者については〔図2〕と〔図3〕を見ても明らかなように、Weak Conflict の場合、傾斜が少ないことが分かるが、Weak Conflict は元来容易なコンフリクトであるので解決にそれ程時間を要せず、ApAp や AvAv などの Strong Conflict のように練習効果が表われにくいことに起因しているようである。

(3) 決定が変化した数についての分析は、正常者・異常者ともにコンフリクト型によって差があり、異常者においては情報の出し方についても差があることを明らかにしたが、後者については、有意差は出なかったけれども正常者においてもその傾向があることが認められた。即ち、Pre の段階で Strong Conflict を経験した場合、自己の決定に対する確信が弱い故に、その決定に対する不協和な情報を呈示されたことによって、Post での決定に変化が見られ、又 Conflict 型如何にかかわらず、情報が呈示された場合は呈示されない場合に比べて、Post での変化が起りやすい。又、異常者が正常者に比べて情報呈示の影響を受けやすいということは、Pre の決定後の自己確信を不協和情報を呈示されたにもかかわらず、Post においても固持するということが、異常者にとっては正常者程には容易ではないということであろう。異常者においては、Pre の決定後に大きく存在する不協和が情報呈示によってさらに増大せられ、最

終的に決定の変化をもたらしたものと考えられる。

(4) 自己の反応レベルより時間がかかっている場合は、決定が変わりやすいということが明らかにされた。Pre の段階で決定に迷ったコンフリクト対は、それだけ不協和が大きく自己確信が小さいため、情報の影響を受けやすい。決定の変化は、不協和を減少ないし消滅させるだけの十分な自己確信がないところから起ると考えられる。Festinger によると、人はコンフリクト解決後の不協和を低減ないし不協和の増大を回避するために、自己の決定に対する確信を増すよう行動し、同時に選択肢の魅力の格差を増大させようとするが、不協和の増大を回避し得ないとき自己の考え方を変える。これについて彼は「外界の情報に関する認知と、自己の普段の行動に関する認知の間に不協和があるとき、人はしばしば自己の行動を変える：なぜなら外界からの認知要素を変えることは非常に困難であるから」と述べている。

これと同様のことが本実験の結果についても指摘できる。それが Weak Conflict である場合、或は Pre においてあまり迷わずに決定出来た場合、或は異常者に比べて正常者の場合、自己の決定に関する確信は大きく、不協和情報が左右されることは少ない。しかし Strong Conflict や決定に迷った場合、そして異常者の場合は不協和が大きく、不協和情報呈示によってその不協和がさらに増大せられると、自己の決定に対する確信をいくら増大させても不協和という不快な感情は消えない。そこで人は自己の決定を覆えて安定した快の状態を得ようとする。決定を変えるということは以前の決定に対する不協和情報が今度は協和情報に転化するということであり、協和の状態を得るためには、自己の記憶の中で決定に関する限られた協和情報を探し求めることより容易な手段である。不協和情報を呈示されたことによる態度変化は、それ故に自己確信と不協和の相互作用の関数であると考えられる。

(5) 被説得性に関する性差の分析で異常者において性差が見られなかった事実は、被説得性に関して異常である心の程度が、性差の程度を上まわっていたものと解釈出来る。即ち、男性においても異常になると被説得性が高まり性差は見られなかった。このことは、男性においてパーソナリティ要因によってほぼ差があったことに起因しているようである。全体的傾向としては従来の研究を支持した\*\*。

\*\* 従来の研究は被説得性とパーソナリティ要因との間に linear な関係があることを明らかにしたが、Cox and Bauer (1964), Silverman (1964) 等の実験においては curvilinear な関係を見い出しており、それらの結果の普遍性については今後の検討を待つべきであろう。おそらくは変数の取り方によって異ってくるようである。

現在の世界の大部分の国においては、女性に対してより高い服従性・従順性を要求しているという文化的な性の役割の概念で従来の諸研究並びに本実験の結果を解釈することが出来るにしても、従来の研究では筆者の知っている限り実験者はすべて男性であり、このことが性差に対して全く影響していなかったとは断定出来ない。

被説得性に関する性差およびパーソナリティ要因による差についてはいまだ明らかではなく、被験者のパーソナリティ属性としての被説得性（攻撃性、抑鬱性、不安神経症傾向、強迫神経症傾向、自我防衛など）、文化的な性の役割、実験者の性、自我関与の強度などが影響要因となっているようである\*\*\*。

### 結

本実験で得られた結果は臨床的に見ても興味深い。特に異常者はコンフリクト解決に時間を要し、又決定後も自己確信が弱く不協和が大きい。逆説的に言えば、かかるパーソナリティ故に異常になったとも考えられる。異常者自身は内観的に自己の社会的不全性を感じているかも知れないし、そのことが他者への追従行動を促し自己の不全性を補足せしめているのかも知れない。又、筆者は本実験により、態度変容は自己確信と不協和の相互作用的関数ではないかという示唆を得た。いずれ機会があればこの問題を扱ってみたいと考えている。

いずれにせよ実験コンフリクトと臨床コンフリクトの間隙を埋めて行くのが今後の方向であろうし、実験的にコンフリクトや不協和を生じさせる時には出来るだけそれが純粋なものであるよう計画を立てて行かねばならない。

本稿を閉じるに当り、終始懇切なる御指導を賜った小川隆教授、日本女子大学高橋たまき博士に感謝の意を表します。

### 引用文献

Andreas, B. G. 1958 Motor conflict behavior as a function of motivation and amount of training. *J. exp. Psychol.*, 55, 173-178.  
 Arkoff, A. 1957 Resolution of approach-approach and avoidance-avoidance conflict. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 55, 402-404.  
 Berkowitz, L. and Lundy, R. M. 1957 Personality characteristics related to susceptibility to influence by peers of authority figures. *J. Pers.*, 25, 306-316.  
 Berlyne, D. E. 1961 Conflict and the orientation

reaction. *J. exp. Psychol.*, 62, 476-483.  
 Canon, L. K. [1964 Self-confidence and selective exposure to information. In L. Festinger (Ed.) *Conflict, decision, and dissonance*. Stanford: Stanford University Press.  
 Cartwright, D. and Harary, F. 1956 Structural Balance; A generalization of Heider's theory. *Psychol. Rev.*, 63, 277-293.  
 Cox, D. F. and Bauer, R. A. 1964 Self-confidence and persuasibility in women. *Public Opinion Quarterly*, 28, 453-466.  
 Festinger, L. A. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. Row; Peterson. (末永俊郎監訳, 1965, 認知的不協和の理論. 誠信書房)  
 Freedman, J. L. 1964 Involvement, discrepancy, and change. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 69, 290-295.  
 浜 治世, 1965a 先行コンフリクト訓練の後続遂行に及ぼす効果. 心理学研究, 36, 1-9.  
 浜 治世, 1965b 不規則図形による実験コンフリクト. 心理学研究, 36, 239-243.  
 Heider, F. 1946 Attitude and cognitive organization. *J. Psychol.*, 21, 107-112.  
 Hovland, C. I. and Janis, I. L. 1959 Summary and implications for future research. In C. I. Hovland and I. L. Janis (Eds.), *Personality and Persuasibility*. New Haven; Yale University Press  
 Janis, I. L. 1954 Personality correlates of susceptibility to persuasion. *J. Pers.*, 22, 504-518.  
 Janis, I. L. 1955 Anxiety indices related to susceptibility to persuasion. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 51, 663-667.  
 Janis, I. L. and Field, P. B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In C. I. Hovland and I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven; Yale University Press.  
 Janis, I. L. and Rife, D. 1959 Persuasibility and Emotional Disorder. In C. I. Hovland and I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale University Press.  
 Jecker, J. D. 1964 Selective exposure to new information. In L. Festinger (Ed.), *Conflict, decision and dissonance*. Stanford: Stanford University Press.  
 King, B. T. 1959 Relationship between susceptibility to opinion change and child-rearing practices. In C. I. Hovland and I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven; Yale University Press.  
 Lesser, G. S. and Abelson, R. P. 1959 Personality correlates of persuasibility in children. In C. I. Hovland and I. L. Janis (Eds.), *Personality and persuasibility*. New Haven: Yale University Press.  
 Lewin, K. 1935 *A dynamic theory of personality*.

\*\*\* Janis (1954), Hovland and Janis (1959), Cox and Bauer (1964), Freedman (1964), McGuire (1968) を参照。

- New York: McGraw-Hill. (相良守次・小川 隆 訳, 1957, パーソナリティの力学説, 岩波書店)
- Linton, H. 1954 Rorschach correlates of response to suggestion. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 49, 75-83.
- Linton, H. and Graham, E. 1959 Personality correlates of persuasibility. In C. I. Hovland and I. L. Janis (Eds.), *Personality and Persuasibility*. New Haven: Yale University Press.
- Mann, L. 1969 *Social psychology*. New York: John Wiley & Sons.
- 松山義則, 1965 弁別コンフリクトにおける刺激文脈と発達の効果. 心理学研究, 36, 248-252.
- McGuire, W. G. 1968 Personality and susceptibility to social influence. In E. F. Borgata and W. W. Lambert (Eds.), *Handbook of personality theory and research*. Chicago: Rand McNally.
- Newcomb, T. M. 1953 An approach to the study of communicative acts. *Psychol. Rev.*, 60, 393-404.
- Osgood, C. E. and Tannenbaum, P. H. 1955 The principle of congruity in the prediction of attitude change. *Psychol. Rev.*, 62, 42-55.
- Ringuette, F. L. 1965 Selected personality correlates of mode of conflict resolution. *J. Pers. soc. Psychol.* 2, 506-512.
- Schill, T. 1966 The effects of type and strength of induced conflict on conflict generalization and later preference for conflict stimuli. *J. Pers.*, 34, 35-54.
- Silverman, I. 1964 Differential effects of the threat upon persuasibility for high and low self-esteem subjects. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 69, 567-572.
- Singh, U. P. 1970 Sex and age difference in persuasibility. *J. soc. Psychol.*, 82, 269-270.
- Whittaker, J. O. and Meade, R. D. 1967 Sex and age variables in persuasibility. *J. soc. Psychol.*, 73, 47-52.
- Worrell, L. 1962 Response to conflict as determined by prior exposure to conflict. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 64, 438-445.
- Worrell, L. 1963 Intraindividual instability and conflict. *J. abnorm. soc. Psychol.* 66, 480-488.
- Worrell, L. 1964 The preference for conflict: some paradoxical reinforcement effect. *J. Pers.*, 32, 32-44.
- Worrell, L. and Castaneda, A. 1961 Response to conflict as a function of response-defined anxiety. *J. Pers.*, 29, 10-29.
- Worrell, L. and Hill, L. K. 1962 Ego strength and anxiety in discrimination conflict performance. *J. consult. Psychol.*, 26, 311-316.
- Worrell, L. and Worrell, J. 1964 Generalization of conflict and conflict tolerance. *Psychol. Rep.*, 14, 203-215.
- 山本浩市, 1967 運動コンフリクトの型の後続試行への効果. 心理学研究, 38, 148-155.